

Bloom
as
a leader.
SINCE 1901
Japan Women's University

図書館だより

目次

新しい知の広場の誕生——図書館開館を祝して	—大場 昌子	1
新図書館のこれからをデザインする	—篠原 聡子	2
新図書館のラーニング・コモンズについて	—JWU ラーニング・コモンズの新たな姿—	
	—高野 晴代	3
泉会寄贈による「ケルムスコット・プレス全刊本53点」について	—川端 康雄	4
“VERITAS VIA VITAE”に関する周辺エピソード	—臼杵 陽	6
目白キャンパス図書館新設までの道のり	—中曽根 緑	7



新図書館全景

新しい知の広場の誕生——図書館開館を祝して

大場 昌子

2019年4月3日、待望の図書館がついに開館しました。

本学が誇る卒業生の世界的建築家、妹島和世氏（住居学科卒）の設計による、地上4階、地下1階建ての図書館は、四方から光が差し込む明るく開放的な空間が特徴的です。エントランスを入るとラーニング・コモンズが広がり、グループ研究室やレクチャールーム、そして貴重書を適切に保管するための貴重書室も完備されています。閲覧席の木製の机と椅子は前図書館のものを再利用していて、前図書館で学んだ学生たちの軌跡に想像が及ぶでしょう。

1964年、東京オリンピックの年に開館した前図書館は、上代タノ第6代学長が「『自主性と創造性』を学問研究に、また人間形成に徹底するため」の図書館を目指して、母校ウェルズ・カレッジの“Students Centered Library”の設計図に触発されて建設準備に至ったものでした（開館「ごあいさつ」より）。結果として、当時としては珍しかった全開架方式の図書館が完成しました。上代元学長が述べられた「この図書館を中心とする学園の共同体生活によって、真の自己を発見し、自由人として創造の喜びと社会奉仕の貴さを自覚し、何ものにも動かされない固い信念を養うことに大きな期待がかけられております」（『図説 日本女子大学の八十年』より）という図書館の役割は、現図書館の構想段階で学修支援部会（学園総合計画委員会のもとに設置）によってまとめられた以下のコンセプトの中に確固として受け継がれています。

- ・ 自念自動の拠点として知の創造の場を提供する
- ・ 自学自動の自発的学修を支援する
- ・ 開架を重視し、蔵書に親しめる
- ・ 学術情報の拠点として印刷媒体および電子媒体資料を並行してサービスする
- ・ 文化的交流、思索、憩いの場があり、豊かな人間性が育まれる知的広場に

こうした役割を担う新しい図書館は、妹島氏の設計によって斬新な建物に生まれ変わりました。妹島氏はその設計について説明されたときに、別の階にいる学生の様子が目に入ってくるような構造、とおっしゃったことが私にはとても印象的でした。「それぞれに自分の時間を過ごしているのだけれど、孤立しているのではなくて、柔らかく、みんなここにいるな、ということが無意識に感じる距離感——[中略] それこそが建築の力だと、わたしは思っています」（https://wired.jp/waia/2018/14_kazuyo-sejima/）—インタビューで語っておられる妹島氏のこの言葉が端的に表現されています。

創立者成瀬仁蔵が唱えた「自学自動」を実践する場として、そして他者との学び合いの場として、新しい知の広場が日々賑わい、本学の教育・研究がさらなる発展へと導かれることを大いに期待いたします。

（学長・英文学科教授）

新図書館のこれからをデザインする

篠原 聡子

日本女子大学120周年記念事業の最初の建築である新図書館が竣工し、この4月から利用が開始された。地下1階、地上4階という低層の建築で、透明感のある内部空間をゆったりとしたスロープが深い庇のように建物をとりまく。この特徴的な外観に加えて、豊明幼稚園へのアプローチをかねた入り口付近は、通りに面してレンガ色のペープメントが広がり、目白通りの雰囲気すら、一変させたように思える。自動ドアを通り、最初に目にするスロープはまさにギャラリーである。そして、アクセス階の2階には、学生が自由に集まって学習できるラーニングコモンズが広がる。この開放的かつアクティブな空間とは打って変わって、地下1階、1階は静寂な空間が用意されている。学生たちは、おのおのお気に入りの場所を発見しているようである。様々な居場所があり、しかも、それがスロープや吹き抜けによって、ゆるやかに連続しているあたりは、まさに妹島建築の真骨頂と言えるだろう。

一方で、ここに至る道程は平坦ではなかった。泉山地区ではなく、目白通りを挟んだこの図書館の配置には、多くの議論があり、主要な大学の施設がある泉山地区にあるべきとの意見が多くあった。本学は、文京区目白台という都心の極めて好立地に位置するが、その敷地は不忍通りと目白通りに分断されており、大学の施設は道路を挟んで配置されることになる。新図書館以前に、児童学科の施設を含む新泉山館は目白通りを挟んで泉山地区の対岸にあり、体育施設は不忍通りを挟んで立地している。しかし、今回の目白キャンパスのデザイン構想の一つの主軸は、この分断を目白台、雑司ヶ谷という地域と多面的に接する機会に転換しようとするところにある。

かつて、ベネチア建築大学を訪ねたとき、その建ち方があまりに日本の大学と異なるので驚いた。建物は、街の中に散在して、その校舎は直接通りに面している。建物によってはエントランホールや中庭あたりまでは、ふらりと立ち入ることができ、それらはタウンスケープの一翼を担っている。ヨーロッパにはこうした都市に紛れ込んだような都市型のキャンパスは少なくない。そもそも、大学というものは、教会前の広場、修道院の回廊、といったところに教師と学生が集い、都市に寄生するように始まったのであるから、その方がオリジナルの姿といえるのかもしれない。ヨーロッパの都市型の大学の在り方をそのまま本学に持ち込むことができないが、大学という建築が街と関わりながら存在する可能性は参照できるように思う。

日本女子大学の目白キャンパスの立地は、もちろん、ベネチアとは異なるが、市街地に埋め込まれた敷地である点は同様である。しかし、街との関係と言いつつも、私自身、本学に在職して20年以上になるが、この静かな住宅地の中で何が起きているか、あまり考えずに過ごしてきた。第二体育館の建設にあたって、近隣説明会を開くとその出席者の方々のほとんどが80歳を超えていた。それらの人々は、学生がうるさい、寮の塀が殺風景であるなど、現在の大学にあり方に少なからず不満を持たれていたが、災害時に避難の拠点にしてもらえないのではないかといった期待ももたれていることが分かった。少子高齢化が進行する日本の住宅地にとって、若い人々が集う大学という施設がもつ可能性は大きい。現在、日本女子大学も地域連携を模索しているが、大学の建物を通じた地域との繋がりと物理的な観点も捨てることはできないのではないか。大学は、第一義に学生のためにある。だからこそ、大学という建築は、その場所に対する学生の当事者意識を育てる空間でなくてはならない。私たちは、切り取れた塀の中に生きているのではないのだから。

外観的にも、配置的にも、この開放的な新図書館は、地域との関係、内部の使い勝手など、使い手に多くの問いを投げかけている。開いているものを閉じることもできるし、開いた部分を利用して外部にメッセージを発信したり、地域との協働のイベントの開催も可能であろう。建築は竣工が完成ではない、その建築がある限り、デザインされ続ける。バトンは使用者である学生、そして私たち教職員に渡されたのである。今、私たちの新図書館は、デザインの第2フェーズに入ったのである。

(百二十周年記念事業推進本部建設事務室長・住居学科教授)

新図書館のラーニング・コモンズについて —JWU ラーニング・コモンズの新たな姿— 高野 晴代

新図書館のゲートを入るとすぐ右奥に、落ち着いた色で統一された椅子と動かしやすい机が置かれた空間が目に入る。そこが、学生たちのための学習（学修を含む）空間—ラーニング・コモンズ—である。学生たちが話し合い、学生たちによって新しい考えを創り上げていく場所を提供すると同時に、自分たちの先輩（ラーニング・サポーター）から研究の方法や論文執筆の進め方などを相談できる場所として設けられた図書館の象徴的な空間と言える。

ラーニング・コモンズは、ここ20年の間に各大学においてその数が飛躍的に伸びた学修スペースであり、そこには、学士教育の質的転換、いわゆる能動的学修（アクティブラーニング）の推進が背景にある。ただ、本学においてこの考え方は今に始まったものではない。「共同研究室」が旧図書館開館時から設置されたように、創立者成瀬の提唱する「自学自動」の精神とそれを継承した目白地区図書館設立時の上代タノ元学長の意志を受けて、協同学習の空間を造った伝統がそこにはある（図書館だより（No.154）の平館英子前図書館長による記事に詳しい）。

新図書館のラーニング・コモンズについて、学修支援部会では次のようなミッションステートメントを作成した。

1. 蔵書という知の体系に出会う場
2. 学修相談ができる場
3. 自ら学び、自ら思考・創造する場
4. 共に学びを深め、共に成長する場
5. 人々と出会い、文化的交流が生まれる場

こうした意識のもと、日々の授業の課題をこなし、予習や復習をする時間を、自宅ばかりでなく、このラーニング・コ



モンズでの書籍や友人、ゼミの仲間や先輩をはじめ様々な出会いを通して、それが豊かな学びに繋がることを、この空間は目指している。それをさらに効果的にしているのが可動式のプロジェクターやインタラクティブ機能内蔵プロジェクターなどで相談しながら研究を進められる電子機器が備えられている点であろう。加えて、日本女子大学がすべての学生に課している卒業論文や卒業制作を作成する場としても学びあい、先輩からのアドバイスを受けるといった支援の場でもある。時には資格取得の助言も受けられ、また教員のタイムリーな話題を提供するミニ講座が開催される交流の場にもなる。学生たちが自ら計画したイベントの開催も期待される。

こうした効果を発揮するラーニング・コモンズは、2021年に出来上がる新教室・研究室棟地下1階にも設置される。こちらのミッションステートメントは、

1. 学外学修を推進する場
2. 新たな学修支援を受ける場
3. 社会及び地域の課題に向き合い・自ら提案する場
4. 世界で、または世界を視野に入れて活躍できる人材育成の場

とした。このラーニング・コモンズには、国際交流と社会連携を推進する場として、ネイティブ教員と話せる国際的な環境を提供するランゲージラウンジ、今回新たに社会連携コンシェルジュが常駐するスペースが計画されている。日本に居ながらにして、外国語のみを使用し、留学生とも交歓する特別の空間が作られる。また社会連携のラーニング・コモンズでは、コンシェルジュが対応し、どのようにしたらボランティアができるか、どのようにしたら学生として、社会と繋がっていきけるかなどを考える場所を提供したいと考えている。これもまた、創立者の教育理念を体现する学生支援の一つとして、社会連携活動を援助するコモンズと言えよう。

日本女子大学の長い伝統に基づいて造られたというべき新たな学びの場である2箇所のJWUラーニング・コモンズ、まずは図書館、そして新教室・研究室棟のJWUラーニング・コモンズが、ますます活用されることを切に期待したい。
(学修支援部会長・日本文学科教授)

泉会寄贈による「ケルムスコット・プレス全刊本53点」について

川端 康雄

2019年5月11日（土）の泉会総会において、今年度の泉会の事業計画として、ケルムスコット・プレス刊本52点の「貴重資料購入援助費」による購入という原案が承認され、これによって日本女子大学図書館がすでに所蔵する『チャーサー作品集』（2009年に泉会の同援助費で購入）と併せて全53点67冊が揃った。日本国内で他にも全刊本を所蔵する機関はあるが、後述するように、本館のセットは、本の状態の良さに加えて、他に見られないいくつかの特徴を有している。

ケルムスコット・プレスはイギリス19世紀の詩人・工芸家のウィリアム・モリス（1834-96年）が1891年に設立した印刷工房である。それは「プライベート・プレス」（private press）、すなわち「ある個人もしくは小集団が設けた利潤追求を主目的としない小規模の印刷所」であった。そのたぐいではもっとも評価が高く、出版印刷文化史のなかで常に特筆される印刷所である。その「印刷」とは活版印刷、すなわち鋳型によって鋳造した金属製活字の組版をプレス印刷機によってインクで紙に刷ることで、つまりは15世紀中葉にドイツのゲーテンベルクが発明して以来、20世紀の第三の四半世紀まで主要な印刷術として世界中で使われてきた技法である（印刷術の多様化によって現在では活版印刷はごく一部でしか使われていない）。ケルムスコットというのはイギリスのコッツウォルズ丘陵にある地名にちなむ。テムズ川上流にあるその村の古い建物（ケルムスコット・マナー）をモリスは自身の別荘として愛用した。

モリスは現在では壁紙やテキスタイルなどのパターン・デザインの作者として日本でもかなり知名度が高い。2018年から19年にかけて、「ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」という企画展が日本国内を巡回しているし（いま本稿を書いている時点で横浜のそごう美術館で開催中）、さらに「ラファエル前派の軌跡展」（三菱一号館美術館）、「ある編集者のユートピア」（企画展、世田谷美術館）でもモリスデザインが出品されていて、この方面でのモリスへの関心の強さがうかがわれる。

美しい本づくりもモリスの生涯をとおしての強い関心事のひとつであり、青年時代からカリグラフィや彩飾手稿本の制作を手がけている。また自著や愛読書を読みやすくかつ美しいかたちのブックデザインで制作する企図も早くから試行しているが、思うような結果が得られず、それがようやく実現したのはモリスの晩年に至ってからだ。

モリスは1891年1月にロンドン西郊ハマスミスの自宅近くにケルムスコット・プレスを設立、ベテランの印刷職人を雇い入れ、友人の画家エドワード・バーン＝ジョーンズに挿絵の多くを依頼、自らは3種類の活字体、および装飾頭文字や縁飾りなどのオーナメントをデザインし、1891年4月完成の最初の刊本『輝く平原の物語』から1898年の最後の刊本『ケルムスコット・プレス設立趣意書』に至るまで、全部で53点65巻の美しい書物を印刷した（1896年10月のモリス没後は秘書のシドニー・コッカレルが業務を引き継いだ）。それらの書物群の見事な出来映えに刺激されて、ダヴズ・プレス、エセックス・ハウス・プレスなどの後続のプライベート・プレスが興隆したのみならず、印刷業界全般にすぐれた模範を与えて商業印刷の質の向上にも貢献した。たとえば本の見開き2ページのなかで版面と余白のバランスをどう取るかについてのモリスの提言は、「ウィリアム・モリスの法則」として出版編集者のための手引き書に援用される影響力をもった。

ケルムスコット・プレス本のうちで最高傑作であり、「世界の三大美書」と評される『ジェフリー・チャーサー作品集』（1896年）は、2009年度に本学図書館のコレクションに加わって以来、これまでたびたび特別展示の時期を設けて、学生や保護者にむけて公開されてきた。このたび全点が揃ったことの意義は大きい。本年5月11日の泉会総会の折には、新図書館において初の特別展示がおこなわれ、泉会会員、また学生の多くが見学に訪れた。このコレクションには同印刷所の歴史に関わる関連資料などが附されているなど、付加価値が加わっている。これについては個々の刊本の特徴とともに稿を改めて詳細に論じたいと思うが、取り急ぎそれらの資料について列挙しておく。

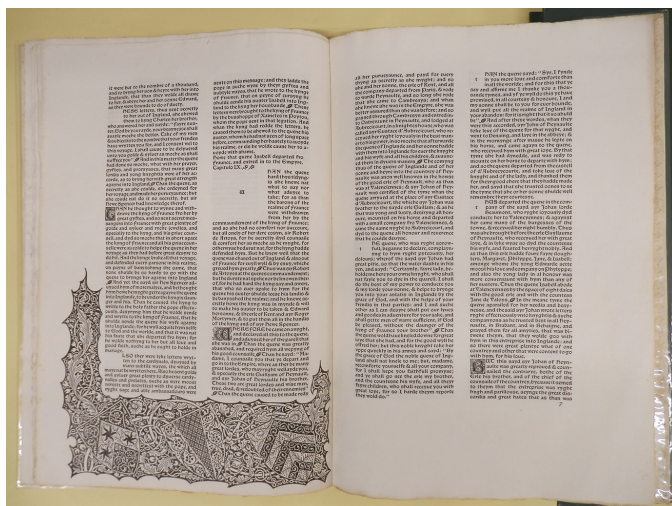
1. 『プロテウスの恋愛抒情詩と歌』（『グウィネヴィアの抗弁』のための装丁の試作）
2. 『トロイ物語集成』（校正用見本）
3. 『ゴドフロワ・ド・ブイヨンとエルサレム征服の物語』（モリス夫人献呈本、『狐のルナールの物語』の試刷1葉付）
4. 『魔女シドニア』（モリス夫人献呈本）
5. 『フローラス王と麗しのジャンヌ』（ケルムスコット・プレス刊本の注文用紙付）
6. 『ウェールズのサー・パーシヴァル』（軟ヴェラムの特別装丁）
7. 『世界のはての泉』（エドワード・バーン＝ジョーンズの自筆書簡付）
8. 『フロワサル年代記』試刷（フィリップ・ウェップ宛のモリスの書簡のゴールデン・タイプによる印刷1葉を付す）

このうち、最後の『フロワサル年代記』試刷はモリスが『チョーサー作品集』と並ぶ「年来の宿願」として、完成にむけて紋章などの新たなデザインを準備しており、組版も始めていたものの、モリスの死去によって完成に至らず、秘書のコッカレルが1896年12月に紙刷版16頁を32部印刷してモリスの友人知古に頒布した。翌1897年にヴェラムの試刷4頁が160部刷られて一般に販売された。その点で紙刷版のほうが希少価値が高いという珍しい例であるが、本コレクションでは紙刷16頁とヴェラム刷4頁の両方の試刷が揃っているという点で極めて価値が高い。

こうした付加価値を有するケルムスコット・プレス刊本を本図書館が全巻所蔵することのメリットは大きい。筆者自身は英文学の方面から文学作品を中心にモリスを研究してきたのであるが、活動領域が多岐にわたるモリスの仕事の評価するためには学際的なアプローチが有効である。たとえば木口木版による挿絵入り本は絵本の黄金時代と目される英国ヴィクトリア朝期の印刷・出版文化史に深く関わるものであり、これは家政学部児童学科所蔵の（ウォルター・クレインやランドルフ・コールデコット等の）資料と重ね合わせて考察することができるだろう。さらに本資料は、デザイン史の観点からのアーツ・アンド・クラフツ運動と民芸運動の比較研究をふくめ、大学全体の人文科学研究のための一次資料としても有用であるのと同時に、日本女子大学の教養教育のさらなる充実に資する教材ともなると確信している。このコレクションによって、創立120周年を迎える本学において、目白キャンパス新図書館の魅力がさらに増したということは断言できる。

最後になるが、このような貴重な資料の価値をお認めくださり、新図書館開館記念資料として購入援助を賜った泉会会長、役員各員、そして会員みなさまに心から謝意を記したい。

(英文学科教授)



『フロワサル年代記』試刷（紙刷）、ケルムスコット・プレス、1896年（所蔵：日本女子大学図書館）

“VERITAS VIA VITAE”に関する周辺エピソード

臼杵 陽

旧図書館の正面ファサードには“VERITAS VIA VITAE”というラテン語銘文が掲げられていた。そのラテン語の解釈についてはこれまでもいろいろな議論があった。川端康雄・英文学科教授の議論にしたがえば、これまでの「公式」の日本語訳であった「生を通しての真理」なのか、あるいは川端教授が新たに唱える「真理は生の道」なのか、という二つの解釈がある。もちろん、門外漢の私がラテン語の解釈としてどちらが正しいと判断することはできない。ただ、ラテン語文法的には、川端説「真理は生の道」の方が妥当だろうと考えている。このように言って、別にえらそうに行司の役を担おうというつもりはない。私の専門とするイスラーム研究あるいは中東現代史のエピソードと周辺的に関わるという理由から少しは重なる部分もあるので、紹介してみたいと思っている。

私は学生時代にアラビア語と現代ヘブライ語に基づいて中東現代史を勉強した。当時、イスラーム学の泰斗・井筒俊彦氏（1914～93年）が革命騒ぎのイランから帰国して日本語の著作を数多く出版していた。井筒氏はそれ以前、本学とも協定のあるカナダのマギル大学教授も務めていた。井筒氏の影響もあって、私も一時はイスラーム哲学を勉強しようと思ったこともあった。そのため、旧約聖書のヘブライ語や新約聖書のギリシア語（私が勉強したのは十二人訳聖書のコイナー方言ではなく、プラトンやアリストテレスのアッティカ方言であった）、そしてラテン語も少々かじった。イスラーム哲学は、ギリシア語で書かれた古代ギリシア哲学・科学をアラビア語への翻訳を通じて（「アラビア科学」として知られている）、「12世紀ルネサンス」（伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫、2006年、参照）が起こる。この時期、イベリア半島やシチリア島でアラビア語からラテン語への翻訳が盛んになり、ラテン語で書かれた中世キリスト教神学の最高峰トマス・アクィナスに繋がっていく。

解体中の旧日本女子大学図書館が開館したのは上代タノ学長時代の1964年6月23日である。初代図書館長は、詩人としてもよく知られた西脇順三郎・慶応義塾大学名誉教授であった。当時、図書館建設に当たって、松本重治氏（1899～1989年）が図書館建築委員会委員長に就任した。松本氏は戦前、現在の共同通信社や時事通信社の元となった同盟通信社を経て、戦後国際文化会館理事長を務めた（松本重治『上海時代』中公文庫、改版、上下巻、2015年）を参照）。ここで松本氏の名前を挙げたのは、個人的な体験で恐縮であるが、私自身は松本氏が設立した国際文化会館の奨学金を得て、エルサレム・ヘブライ大学に2年間留学した経験があるからである。

エルサレムは三つの一神教であるユダヤ教、キリスト教、そしてイスラームの共通の聖地として知られている。エルサレム現代史を振り返ると、第一次世界大戦中にイギリスによって占領される。その時の最高司令官がアレンビー将軍である。将軍は十字軍以来やっとイスラーム教徒からキリスト教徒の手に聖地を奪還したと考えていた。同じ時期、「二枚舌外交」で知られるフサイン・マクマホン協定に基づいて、「アラビアのロレンス」ことトマス・エドワード・ロレンスの活躍があった。

上代学長が旧図書館の開館の挨拶で「玄関正面に掲げられた標語 VERITAS VIA VITAE でございますが、その標語の選定について申し上げます。それは松本建築委員長をはじめ、多くの先生方、また最近再び日本に来られた英国詩人ブランデン先生にまでお考えいただきまして、ほんとうに多くの方々の熱心なご助言を受けて決定した次第であります」と述べている。ここで注目したいのがエドモンド・チャールズ・ブランデン（1896～1974年）である。というのも、映画公開とともにベストセラーになった『アラビアのロレンス（改訂版）』（岩波新書、1963年）の著者としても知られる英文学者・中野好夫（1903～85年）が「まえがき」で次のように記しているからである。

「もっとも筆者（中野）の場合、ロレンスへの関心は（戦前の1940年に出版した初版の）新書を書くためにはじまったわけではない。筆者がまだ東大英文科の学生だったころだが、若いイギリス詩人エドモンド・ブランデン氏が教師として赴任され、筆者もずっとその講義、指導を受けた。ブランデン氏とロレンスでは、氏の方が十近く年少であるが、氏も学窓から第一次世界大戦の西部戦線に出ていた新進詩人であり、ロレンスのことは十分に関心をもっておられたばかりでなく、その後まもなく（1927年）ロレンス生前におけるほとんど唯一の評伝『ロレンスとアラブ人』（Lawrence and the Arabs）を書いた、これも詩人のロバート・グレイヴズがブランデン氏の友人ということもあって、氏の話はある程度パーソナルな調子すらおびて、私たちの関心をそそった」（中野好夫『アラビアのロレンス（改訂版）』岩波新書、1963年、ii ページ）。

中野が挙げているグレイヴズ（1895～1985年）の著作は現在でも日本語で読むことができる（ロ

バート・グレーヴス著、小野忍訳『アラビアのロレンス』（角川文庫ソフィア、改版、1995年）。つまり、かなり早い段階で本書も翻訳されたことは、日本におけるロレンス・ブームとその神話化を考える上で示唆的であろう。

このように、本学図書館の歴史は、中東現代史の出来事にまで広がっていくということも頭の隅に置いておいていただきたいと思うのである。（図書館長・史学科教授）

目白キャンパス図書館新設までの道のり

中曽根 緑

2019年4月3日（水）、目白キャンパスに新しい図書館がオープンした。これまでの検討の道のりを振り返ってみたい。旧図書館は、上代タノ第6代学長の確たる理念に基づき構想され1964年に開館、当時としては珍しい全開架を採用、モジュラープランで建築され、1973年の増築、2003年の4階～6階の改修など大小様々なレイアウト変更に耐え、学生をはじめとした利用者に長く親しまれてきた。しかしながら、蔵書量の増大に伴う書架不足は1980年代から問題となっており、新図書館建設の要望が実現しない中、近年は老朽化も否めず、新館建設は喫緊の課題となっていた。

創立110周年の前年にあたる2010年度、事務局内に図書館施設等検討プロジェクトチームが立ち上がり、図書館施設等の今後のあり方について検討を行った。この時の報告書が、後の図書館構想のベースとなる。同年、学園では、内外の情勢変化をふまえ、本学の教育研究基本計画を検討すべく、理事会の諮問機関として学園総合計画委員会が設置され、今日も活動を継続している。

2011年度、本学は創立110周年を迎え、11月、創立120周年に向けたVision120を発表、その中で2021年には西生田キャンパスより人間社会学部を移し、4学部を創立の地である目白キャンパスに統合することが明示された。

学園総合計画委員会のもとには、Vision120実現のため、教育研究改革、キャンパス構想、財政等の部会が設置され、教職協働で各種検討が行われていたが、2012年4月、学修支援部会が立ち上がり、図書館長（島崎館長）、図書館事務部長が構成員として参加、本学における学修支援の現状把握を行い、図書館、メディアセンター、通信教育、その他の部署による学修支援について検討した。

2013年4月、学修支援部会に対して、キャンパス統合に向けた今後の望ましい図書館のあり方（図書館構想）の検討指示があった。目白の図書館については、図書館の改修か新設かの検討から始め、結果としてVision120のシンボリック的存在として新設すべきであるとの判断に至り、教育改革をふまえた真に活用される新図書館のあり方を、基本コンセプト／立地・規模／施設・設備の要件／今後の検討課題としてとりまとめ提出した。西生田図書館についてはキャンパス統合後、現在より収蔵力を高め保存図書館として使用すること、メディアセンターと図書館との関係については組織としての一体化のメリットはないことを確認し、新図書館竣工後のメディアセンターが担う役割や課題についても記載した。同年10月～11月には、図書館としてWebアンケート「LibQUAL[®]」を実施し、学生、教職員の図書館への要望、意識を調査した。

2014年、本学は、キャンパスマスタープラン案作成のため妹島和世建築設計事務所と全体構想の設計契約を結び、11月、目白キャンパス「グランドデザイン」が発表された。改修か新設かが未定であった図書館は、このグランドデザインの中で初めて「新設」の方向が明らかとなった。しかしながら、グランドデザインで示された図書館は、正門向かい側に図書館・体育館複合棟として計画され、立地・規模とも、2013年度学修支援部会・図書館構想の反映が見られず、学修支援部会からキャンパス構想部会に説明を求める等、以後、様々な交渉を重ねていくことになる。

2015年度になり、図書館長（平館館長）が学修支援部会に加え、キャンパス構想部会の構成員にもなり、キャンパス構想の検討に直接参加していくことになった。当年度は、目白キャンパス「グランドデザイン」について学内から意見を聴取し、集約を行う時期であった。前期に、大きな建物の配置（ゾーニング）、建物内の構成についての意見聴取があり、図書館からは、図書館の上に体育館を設置することへの異議、図書館棟3階に予定されていた人間交流室の位置変更、図書館へのアクセス（道路横断）のバリアフリー確保、学生滞在スペース1（図書館脇の円形）についての計画変更を提出した。8月、学内からの意見をもとに学園が建築設計事務所と協議した結果が発表され、図書館上に予定されていた体育館は別棟に移動することとなり、図書館は単独棟として建設されることが決定した。7月からは、建築設計事務所と具体的な図書館関係打合せが開始され、図書

館長、図書館職員が直接、建築設計事務所と意見を交わして計画を進めることとなった。2016年1月には学園から目白キャンパス構想「基本設計条件書」が示された。

上述のとおり、このたびの新館計画の大きな特徴は、図書館単体の計画ではなく、キャンパス構想の中で複数の新設建物の一つとして検討されたという点にある。したがって、図書館に関する検討は、図書館のみならず、学園総合計画の中で関係教職員の参画により進められた。では図書館内の検討組織はどういうものであったかを述べると、図書館長と図書館職員数名で構成する図書館の総合計画を検討する会議体があり、2015年7月までに、運営上及び施設・設備の要件、図書館構成要素を記載した新図書館基本計画書を作成して建築設計事務所との打合せに提出し、以後、図書館を運営する立場から、利用実態や蔵書配置を想定しつつ、図面等の提案を検証、細部にわたり機能面を重視して検討を進めた。館内では、常に、受取図面・資料、打合せ内容、要望提出内容を情報共有し、打合せに参加しない職員も含め全館からの意見聴取、確認を行うよう努めた。また、図書館運営委員会（構成員：図書委員（教員）、図書館長・部課長）には検討の概況を報告し、図書委員会（構成員：教員）からは、2016年度「キャンパス統合時の西生田図書館蔵書の目白への移動、統合後のキャンパス間蔵書移動手段」への要望書、2017年度「図書館への目白通りの横断方法、全面ガラス張りに対する書籍の保護及び外部からの視線対策」に関する質問書が提出された。

2016年度～2017年度、図書館長（白杵館長）がキャンパス構想部会、学修支援部会の構成員となった。2016年4月、目白キャンパス構想について、基本設計条件書をもとに建築設計事務所が作成した基本設計案の学内説明会が開催され、図書館からは「大学図書館の面積の充足、蔵書増加分の収納の見通し」「西生田図書館の書架改修（収納力25万冊増）」「図書館脇の学生滞在スペース」「図書館内のラーニング・コモンズ」「目白通り横断」等の意見を提出した。同年度、学修支援部会では、図書館脇の学生滞在スペース1について設計変更の要望を提出していた。図書館地区の学生滞在スペース1、2の扱いは図書館への包含、別棟と変遷があった。図書館のフロア構成自体、当初図面の段階から下表のように大きな変更があったが、2016年度にはほぼフロア数が固まるに至った。

年月日	図書館	図書館脇の学生滞在スペース	備考
20150526	B F, メザニンF, 1F, 2F	図書館とは別棟	複合棟（図書館棟の3Fに人間交流室等、4Fに体育館）
20150924	B F, メザニンF, 1F, 2F, 3F, 4F	380㎡が図書館と連結	単独棟になる。
20151202	B2F, B1F（メザニンF）、1F, 2F, 3F, 4F	380㎡が図書館と連結	入口、事務室表記なし。
20160218	B1F, 1F, 2F, 3F, 4F	図書館とは別棟となる	メザニンFがなくなる。入口、事務室表記が入る。
20160411	B1F, 1F, 2F, 3F, 4F	図書館内に200㎡、別棟に180㎡となる	入口の位置は目白通りの横断位置により変更があり得る。
20160616	B1F, 1F, 2F, 3F, 4F	同上	
20161007	B1F, 1F, 2F, 3F, 4F	同上	

施設関係では、書架配置計画、閲覧座席数、エントランスのスロープと館内との区切り（資料管理の安全対策）、貴重書室・和装本室・マイクロフィルム保管室の空調、事務スペースの配分、家具やカウンターの形状・配置、トイレの数等の打合せを進めつつ、2017年度後期には、移転業務委託に関する準備打合せも開始し、年度末には業者を決定した。

2018年度には、エントランススロープの形状、家具（閲覧席、ラーニング・コモンズ、貴重書室等）、照明計画、PC・LAN計画、館内放送、展示台、閉館時返却ポスト、銘板・掲示、サイン計画、施設管理体制、消防計画、鍵計画、セキュリティライン、電話配置などの詳細、利用開始後の管理・運用体制の確認などの打合せを行いつつ、年度初めより、移転業者との定例会を持ち、複数回にわたる蔵書配架シミュレーションのやり取りを行う等、移転準備を進め、3月末に移転を完了した。

以上、2010年以降を概観したが、この間、キャンパス統合後の西生田における蔵書収容に関しても複数回要望書を提出してきた。本学図書館は、目白で完結はせず、キャンパス統合後も西生田を保存スペースとして活用し適切な蔵書管理・運用を行っていく予定である。（図書館事務部長）

編集後記 いよいよ新しい図書館での活動が始まった。2月、3月と移転のための閉館でご迷惑をおかけした分、多くの利用をいただいているようで、嬉しい限りである。ところで新図書館にも引き続き、“VERITAS VIA VITAE”の銘文は掲げられているのだが、利用される皆さんはお気づきであろうか。2019年度図書館だより編集委員：浜口都紀、水嶋寿恵、吉原三紀子